

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特許局特許承認第百六二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回二日発行)  
平成十五年十一月一日発行(第百六卷第十一号)

# ホトトギス

十一月号



平成十四年十一月三日 関西ホトギス同人会  
 二階より見れば濃紅葉なりしことありしとるなきとも京の秋時雨快晴にしぐもなることも京らしく  
 十一月三日 関西ホトギス俳句大会  
 名苑といふは且散る紅葉さへ露寒に 加はる風も京のもの  
 十一月四日 関西野分会  
 二条城 低き茶の花垣 抜けて冬耕の一人の影の伸びて来し茶の花に 届く木洩日ありにけり  
 十一月四日 下萌句会  
 風見せて 騒立つ水面柳散る風音の トラへてをりし 笹子かな  
 張りつめし 大気まとひぬ 神無月十一月五日 山田弘子様 兵庫県文化賞受賞  
 最高の日 和を菊にたへあふ  
 十一月六日 ロイヤル俳壇  
 風音に 末枯のはじまつてをり  
 影踏んで 木洩日踏んで 小六月末枯といふ 名苑の 順路あり  
 いづもある 距離 人と鴨人と鴨  
 十一月八日 工業倶楽部  
 初霜に 足音 夜明け ゆきにけり  
 暁 け 九日 朝日こども記者インタビュ  
 質問に 明るき 未来 小六月  
 十一月十二日 大阪倶楽部  
 初霜を 踏み 仕事 顔となる  
 芭蕉 忌と思ひて 京の 空仰ぐ  
 冬日 和包 まれて ぬし 祝ぎ ころ  
 狭庭とて 紅葉 散り 敷く ままに あり  
 時雨 雲 芭蕉の 心 ふれて 過ぐ

十一月十二日 綿業倶楽部  
 とも かくも 冬めく 仕度 旅靴  
 山茶花の 散りて 咲き ぬし こと 知りぬ  
 山 茶花 や 庭の 春秋 巡り 来し  
 十月十四日 清交社  
 麦を 蒔き 終へし 大気 漲れる  
 初冬 の 消息 聞き 旅仕度  
 炉開 の まね ごと を して 庵開き  
 烏も う麦 蒔き し 田と 知つて をり  
 初冬 といふ 油断 より 生れし 鮎鱈  
 麦蒔き しばかり の 畑 についば ぬ  
 炉開 の 火色 親しむ 五六人  
 岳麓 の 荘閉ざされし 初冬 かな  
 初夢 の なかり し 如く 覚めに けり  
 十一月十五日 悼 牧野翁子様  
 冬ぬくき 新居 親しみを られしに  
 十一月十六日 九州ホトギス同人会  
 神煙 ぬた まふ 火の 山 小六月  
 噴煙 の 這ふ 山 肌 の 峨々 と 冬  
 海風 と 山 風 合ひ ぬ 散 紅葉  
 風 来とも 火の 山 裾 の 神 渡  
 神 渡とも 火の 山 の 雲 弘ひ  
 十一月十七日 同人会 一回目  
 星消えて 旅の 短日は じまりし  
 やはら つかき ぼつて こんと ば 小六月  
 十月十七日 九州ホトギス俳句大会  
 今日 噴火 十三年 目 露 寒し  
 冬ざる 景の 語りて をりしもの  
 十月十八日 アサヒカルチャー  
 旅の 日は や 遠き かな 散 紅葉  
 視野 ぶさぐさ 木の 葉 時雨 といふ 利那  
 十月十九日 有恒倶楽部  
 初霜 の 落ち まち 消ゆる 山 日和  
 海 いつか 右に 移り ぬ 石 路 の 花  
 初霜 を 踏む 旅立 の 夜 明 かな  
 初霜 を 踏み つつ 人を 悼み つつ

石路 咲いて みる 狭庭とて 下りて みる  
 別れ 来て 木の 葉 しぐれに 逢ひし こと  
 十一月十九日 無名会  
 火の 山 を 吹き おろし 来て 散 紅葉  
 海 近き 風 の 誘ひ し 散 紅葉  
 時雨 るといひ しばかりに 晴れて けり  
 散 紅葉 さらつて 行き ぬつむじ 風  
 とも かくも 弔句 送りて 人の 冬  
 これほど の 木の 葉 しぐれに 迷ふ とは  
 十一月二十日 夏潮句会  
 吹き 飛べる 木の 葉 時雨 に 身を 置きて  
 昨日 掃き 今日 掃き 明日 へ 散 紅葉  
 散り 尽くす までの 変幻 冬 紅葉  
 遠く 見て 櫛 紅葉 に 着き に けり  
 火の 山 の 風 従へて 冬日 和  
 十一月二十一日 祝「芭蕉伊賀」五周年  
 時雨 するは 芭蕉 の 百こころ 伊賀 親し  
 十一月二十一日 悼 山本百合子様  
 冬籠 して を られ たる 如く にも  
 さそは れて さそひて 紛れ 西の 市  
 又 訃報 届きて 寒き 宵 となる  
 出席 と 聞きて 茶の 花 日和 かな  
 十一月二十二日 悼 安積し子様  
 美しき 旅立 ならん 小 六 月  
 十一月二十二日 悼 高円宮殿下  
 お 悲しみ いかば かりか と 偲ぶ 冬  
 十一月二十三日 句会と講演の会  
 華やきは 枯れ ゆく 萩 に ありに けり  
 弔問 を 終へ 枯萩 の 道へ 出る  
 散り ゆける 枯萩 に して 明る さよ  
 一茶 忌と思ひ つゝ 旅つゞ けをり  
 十一月二十四日 野分会  
 冬耕 の すみ たる 畑 に 豊 かな 日  
 十一月二十四日 悼 坂井建様  
 朴 一葉 舞ひ 落つる 日 の 空 仰ぐ

## フィリピンの旅(その五)

稲畑汀子

私のフィリピン行きを知ってアジア開発銀行日本代表理事としてマニラに単身赴任されている塚原治さんが連絡して来られた。スケジュールはフィリピンを發つ前夜しか空いていないとお伝えすると、それではディナーに是非招待したいと言われた。そして一月二十九日に予定されている在留邦人俳句クラブとの会合にも出席しますと言われた。

坂井建さんの呼びかけで大蔵省の中で俳句をしている人々の集る合同俳句会へ私がお伺いしたのは何年前になるであろうか。その時お会いした塚原治さんは建さんが熱心に指導していた山茱萸会のメンバーの一人であった。その後、ご夫婦でホトトギスに投句を続けて来られていたので日本に居られるものとはかり思っていたのにフィリピンで要職に就かれていますと知って驚かされた。建さんが亡くなったことをどんなに驚いておられるかと思つた。

在留邦人俳句クラブとの会合はマニラ郊外の出来たばかりの新しい高層マンションの一室で開かれた。我々五人を迎えて下さつた十五名程のメンバーの中には小学生の二人も俳人として参加していかかなりな句を作っているそうである。会員達が手分けして

部屋を飾り、写真による熱帯季語集や俳句の記録を壁に貼って待ち受けて下さっていた。テーブルの上には南国の花々が飾られ、マンゴーなどの果物も剥いて並べられてある。部屋の入口はびかぴかに磨き上げられた大理石が滑りそう、そこで靴を脱いでスリッパにはき換えた。

会長の水野ご夫妻の後ろから長身の塚原治さんがにこにここと私たちを迎えて下さっていた。

「お久しぶりでございます」

「本当に、東京でお会いして以来でしようか」

見覚えのある笑顔にほっとした。塚原治さんと建さんの事を少し話したが、間もなく迎えて下さった方々に取り囲まれてしまった。

「稲畑先生、テレビで拝見しております」

「まあ、フィリピンでも?」

「はい」

「ありがとうございます」

日本学校の先生、お花の先生、お茶の先生などもおられるようである。さっそく和菓子とお抹茶が出て来て驚いた。

窓から俯瞰するマニラ湾の情景は間もなく夕日が落ちるのが見られると言われながら案内して下さる。マニラでもこんなに俳句に親しんでいるのですよと一人一人が挨拶して話をして下さるのを聞きながら甘くてとろけそうなマンゴーを頂いた。

「明後日の晩、中華料理にお招きしますので、その時ゆつくりお話ししましょう」

塚原治さんはマニラでボランティア活動をしていると言う。我  
私のやっていることと協力して行けるのかも知れないと思つた  
が、俳句クラブのメンバーたちと別れなければならない時間がす  
ぐに来てしまった。

別れを惜しみながら部屋の大きな窓から見えるマニラ湾に赤い  
夕日が落ちて行くのを後にしてエレベーターに乗った。

ハッピーバースデーチュー、ハッピーバースデーチュー、  
隣の部屋のスピーカーから流れてくる音楽に思わず入口を見ると  
この中華料理のサービスマンの人達がどつと歌いながら入つて来  
て我々のテーブルを取り囲んだ。

「え？」

思わず食べていた手を止め我々も一緒に手を打ち出した。田中  
大使のお誕生日が今日であることを知った塚原治さんの演出であ  
った。捧げ持った大皿にはお饅頭が飾られてある。

ハッピーバースデーの曲の出だしから大きく変わって賑やかな音  
樂が鳴り響いた。まことに中華的な雰囲気じゃらんじゃらんと  
賑やかなことになった。田中大使は頬を紅潮させて

「嬉しいなあ」  
と眩かれた。

塚原治さんも嬉しそうに手を叩いていた。美味しい中華料理に  
舌鼓を打ちながら話が弾んだ。

「素晴らしいお名残の宵になりましたねえ」

フィリピンの旅も今宵限りとなった。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十四年十二月 關西茶トギ支同会

はんなりと京都の秋を惜みけり  
道迷ひつつ時雨雲払ひつつ  
秋惜む車窓の富士は純白に  
十一月六日 NPOみえ  
時雨雲久居の空に育てつつ  
十一月六日 一水会  
文化の日歴史を秘めし二条城  
十一月七日 蕉心会  
立冬の風を集めて隅田川  
丸の内昏めて去りぬ初時雨  
立冬や三百六十五分の一  
大川の水音船音冬めける  
神の留守芭蕉稲荷の静寂かな  
時雨忌を控へ蕉像いよよ寂  
大川の時雨に蕉の旅偲ぶ  
十一月八日「俳句研究」出句  
祭壇に狸々木のひとところ  
三博士祀る 聖堂冬の星  
名古屋過ぎ枯野過ぎれば京都かな  
冬の水洗礼盤に光り初む  
初鴉餅を銜へて逃げゆけり  
御降や虚子館固く閉されて

初御空日出づる国を忘れまじ  
初明り六甲の曇明しゆく

十一月九日 日本伝統俳句協賛玉露冬行会

落葉踏む八百年前の音色秘め  
冬桜風に耐へねばならぬかな  
館址に影伸び切つて冬木立  
嵐山に風を集めて冬日燦  
十一月十日 刈谷市民俳句大会  
大根も並べて句座の整ひぬ  
神渡富士を隠してしまひけり  
時雨雲払ひ三河路輝かに  
十一月十四日 土筆会  
三河路に虚子の足跡石路の花  
熱爛や妻との会話途切れがち  
小春日の公園試歩の人溢れ  
十一月十四日「俳句界」出句  
東の一条の日矢冬来る  
松籟の及ぶ古井戸冬紅葉  
土の香に草原の風馬肥ゆる  
古町の垣は板張り草紅葉  
武士の墓藤衣の人冴ゆる  
木々騒ぐ鎮守の杜の村小春  
鶯の笛刈田広げてゆきにけり  
十一月十七日 小林牧羊様句碑除幕祝句  
九頭竜の永遠の流れや句碑冴ゆる  
十一月十七日 岡山囲む会

底冷の禅堂期する心かな  
重なりて重なりて冬紅葉濃し  
黒々と鳥城冬日を弾きけり  
十一月十九日 草木瓜合同句会

日に蕩けゆく大綿の行方かな  
初時雨建礼門の静寂かな  
北山に日矢射す京の時雨かな  
御所の空陰る早さや初時雨  
大綿の風になりゆく疾さかな  
十一月二十一日 登高会  
江戸千家流に集ひて炉を開く  
炉開や正座五分ともたぬ我  
スポーツ紙ばさと大根包みたる  
文字を追ふ眼を上げ銀杏落葉かな  
炉開や灰白々と現れし  
十一月二十二日 時雨会  
茶の花や岡山城を背負ふ庭  
二の酉に出会ひ三の酉に別れ  
十一月二十三日 ホトトギス社句会  
一茶忌や宮様の忌にならうとは  
名刺に虚子句碑生れて萩枯れて  
萩のまだ枯れゆく力残しけり  
十一月二十六日 若水会  
大綿の深呼吸めく風出でぬ  
美し国切干並べられてをり  
切干を煮て今日は主夫してをりぬ

# 雑詠 汀子選

つくづくと瘦せたる病軀更衣 下関 松本圭二  
 短夜やわが生涯の病魔見し 同  
 明易や不眠疼痛地獄去れ 同  
 吊橋に踏むアルプスの雪解風 金沢 藤浦昭代  
 天上を闇の底とし春の星 同  
 白山の表情尖り来し雪解 同  
 原野焼く野火を恐れず侮らず 大牟田 井上蘇柳  
 輪地焼は密に野焼は大雑把 同  
 野焼 長 大観峰に号令す 同  
 惜春の虚子の世遠く偲ばるる 京都 安原 葉  
 人偲ぶ惜春の情もち寄りて 同  
 洛北の春惜みつつ偲ぶ歩々 同  
 虚子旧居家鳴りの絶えず隙間風 姫路 桑田青虎  
 炉塞いで虚子の面影偲ばるゝ 同  
 虚子の世の目貼の今に色褪せし 同  
 船鉦のうしろ姿となり細身 京都 栗津松彩子  
 水といふ味のあるもの冷奴 同  
 蟻地獄天敵に雨ありにけり 同

固き背のみどりと見しが金亀子 樞原 稲岡 長  
 風とくに朴の花の香乗せて来る 同  
 二階とは花合歓浄土目のあたり 同  
 夏帽に印象顔に覚えなし 東京 今井千鶴子  
 踏み心地どこかが江り竹落葉 同  
 今日のこと今日のハンカチ洗ひつつ 同  
 橡若葉仰ぎ美穂女の忌なりけり 神戸 山田弘子  
 家出することも叶はず蝸牛 同  
 花合歓の雨のあはれの愛でらるる 同  
 東京都祭に動き初めにけり 東京 稲畑廣太郎  
 彼女早や祭の中に消えにけり 同  
 地車の屋根が躍つてをりにけり 同  
 代掻くやすぐ眼の前に無人駅 狭山 大久保白村  
 若き日の母の記憶の夏帽子 同  
 卓上の蟻と遊べり夜の書齋 同  
 目を移すところとところに寒椿 徳島 上崎暮潮  
 虚子偲べとぞもちくれし椿咲く 同  
 虚子迎へ得ざりし鳴門観潮す 同  
 箴を干す梅雨の晴間の男かな 京都 坊城俊樹  
 山門を去る香煙の涼しさよ 同  
 むらさきは白に寄り添ふ花菖蒲 同  
 よろこべば天降りて伽に松蟬も 鳥取 岡田順子  
 句碑守の待宵草の小さきも 同  
 言伝てを果し涼しさ身辺りに 同

## 雑詠句評（十月号より）

三瓶にはかりがねの鳴く夜もある 江津 井上哲王

三瓶と云えば昭和六十三年七月に建立の汀子先生の句碑

摘まずおく松虫草は野の花よ

の姫沼近くの北の原にあるのが真先に思い浮かび、松虫草ははじめ夏の草原、秋の花野、四季の鳥類、季節の気候の変化などなど、汀子先生が「季節の宝庫」と云われた所以の数数が多種多様で俳人渴望の吟行地と云われる。

出雲と石見の国境に跨り、女性的なカーブの美しい死火山であるが、又出雲風土記に出てくる佐比売山とも記され、神話国引の柱と云われる伝説の山としても有名である。男・女・子と名付けられる山山が火口湖を囲み、北の原・東の原・西の原とゆるやかな草原がひらける。

石見ホトトギス大会が開かれて此の季節の宝庫から生れた各人の俳句を読ませて頂いても、如何に美しい自然の景かが窺われるのであるが、その「三瓶にはかりがねの鳴く夜もある」のであると詠まれた。「かり」と云うのはその鳴き声から来ていると云われるが、そのかりの鳴く声はどの様なものであろうか、子供の頃歌った「雁がわたる。鳴いてわたる。鳴くはなげきか喜びか。」とあつたのを思い出しもして、それが夜であれば一層寂しく、思いが募るものであろうと想像するにつけ、読者の詩情も増して深まってくるのである。（基子）

秋に北の国から冬を越すために渡ってくる雁は日本各地の湖や沼などに降り、春になつて暖かくなると又北国へ帰って行く。遙と遠い地から群を成して渡ってくる雁が島根県の三瓶山も通るのか夜になると雁の鳴き渡る声が聞こえる。その声は如何にも哀れがある。それを聞き留めた作者の心も哀愁に誘われていくのであろう。（汀子）（以下略）

# 若水集

## 廣太郎選

登山・清水

草原に歌ふごとくに清水湧く 神戸 藤井啓子  
 岩清水寡黙な人とゐるごとく 同  
 夜は星のために湧きたる清水かな 同  
 教へ子と励まし合ひて山登 静岡 青野菜緒子  
 教師ゆゑ弱音を吐けぬ登山かな 同  
 山彦を確かめながら登山の子 同  
 掬ひたる清水生命線を観る 熊本 山澄陽子  
 苦も楽も登山仲間といふ絆 同  
 平地より岩場に軽し登山靴 同  
 みよし野の金気を帯びし岩清水 神戸 千原叡子  
 登山者にスイッチバックはじまりぬ 同  
 中辺路を外れて清水の溪に入る 同  
 登山帽振りて木陰に友を待つ 久留米 石田風子  
 登山道消えて水禍の跡辿る 同  
 大地踏む音確かなる登山靴 同  
 山清水掬びことばを取りもどす 名古屋 中島真沙  
 帽子乗せ明日を待ちゐる登山の荷 同  
 苔清水掬びて開く島の地図 同

富士登山して富士山を見ざりけり 長野 小池星児  
 余白ある遭難碑ある登山口 同  
 焼印に岳の香浮かぶ登山杖 同  
 分校を出て寄り道の山清水 福岡 池田昭雄  
 濁したる清水はすぐに澄みにけり 同  
 木洩れ日のこぼれて清水湧くところ 同  
 地下に消ゆ鍾乳洞の内清水 東京 橋本くに彦  
 水指に清水満たして茶の湯かな 同  
 一ト碗の濃茶のための清水かな 同  
 朝の嶺登山電車の窓に置き 高槻 会田仁子  
 雲を抜け登山電車の雲に着く 同  
 登山バス牧場の牛を数へつつ 同  
 一世紀経しと聴きたる樾清水 高崎 吉村ひさ志  
 岩清水樾ちらほらと混ざる森 同  
 人等去り清水に静寂返したる 同  
 コーヒーの味のこだはり清水汲む 石川 坂本玲子  
 げた箱に眠りて久し登山靴 同  
 青春を履き古したる登山靴 同  
 手をつなぐ至福の登山ありにけり 東京 木村一成  
 真清水を飲んで身に沁入りけり 同  
 大男岩清水に目細めけり 同  
 息荒く山頂仰ぐ登山かな 八尾 山下美典  
 三角点狭し登山者溢れゐて 同  
 旅人の今も昔もこの清水 同

# 若水集句評 廣太郎

夜は星のために湧きたる清水かな 神戸 藤井啓子

昼間は名水として多くの人を集めていた「清水」なのであるろうか。喧騒が去った後の夜は、自然のままに滾々と湧き出ている。「星のため」という詩的な表現が美しい響きを伴って、季題を美しく詠み込んでいる。静けさが、清水の湧く音をも奇麗に響かせている。

山彦を確かめながら登山の子 静岡 青野菜緒子

潑刺とした情景が見て取れる。筆者も子供の頃経験したが、一人が「ヤッホー」とやれば、次から次へと子供たちは叫びだし、「山彦」が聞こえると大喜びである。季題の楽しい雰囲気が残るところなく表現されている。

掬ひたる清水生命線を観る 熊本 山澄陽子

手相占いをしている訳ではないのだろうが、掌の窪みに溜った「清水」が丁度レンズのようになり、くつきりと手相を浮き上が

らせたのであろう。穢れない透き通った季題の清浄な姿が伝わってくる。

登山道消えて水禍の跡辿る 久留米 石田風子

毎年客で賑わう「登山道」も豪雨や洪水で流されてしまったのであろう。それでも山に登ろうとする人間の強さのようなものも感じるが、何より大自然の恐ろしさ、大きさの方をより強く感じる句である。

聖マリア在すルルドの清水汲む 函館 平山たかし

本家、というのも変な話であるが、フランスの有名な「ルルドの泉」は靈験あらたかな聖地として知られており、世界のカトリック関係の教会などにもこれを模した場所がある。この句の場合も函館のトラピスト修道院と思われるが、平明に、作者の信仰心が季題を通して伝わってくる。

遭難の登山歴ある講師と居 いわき 志賀青柿

どうしても「登山」といえば「遭難」がつきもののように筆者のような素人は考えてしまうが、この句も遭難の経験がある人を詠んでいる。幸い命に別状はなかったようだが、この「講師」は登山に關係する講師なのだろうか。恐ろしい経験だが、その経験を生かし、逞しく教えるのであろう。(以下略)